

古代における東西思想の交流について

——騎馬民族の役割——

山下 太郎

一、古事記とヘイムスクリングラ

情報手段の発達した現代ならともかく、思想の伝達が容易でなかった古代において、その方法はどのようにして営まれたのであろうか。成立宗教の場合には、宣教師とか遊行僧とかが各地を巡って、献身的に布教につとめた、ということも考えられる。しかしもっと昔の、思想といっても神話やミュートスのような形では、人類の思考が表現形式をもたなかった時代において、その伝達とか交流とかは、どのようにしてなされたのであろうか。

実は、そのような時代においても、意外に広い範囲での思想の伝達が可能であったと、考えられねばならぬ理由がある。最近、比較思想や比較文化、比較神話学や比較宗教学などの研究が急速に進んだ結果、これまで全く異種独立と思われていた思想や文化

や神話や宗教の中に、思いがけぬ類似や連関のあることが確かめられ、相互の影響の可能性についての議論も、甚だ盛んとなってきている。

さし当り、アジアとヨーロッパとを一丸としたユーラシア大陸の内部において、こうした影響関係や交流関係を考えるとしたら、どのような手段や媒介が認められるであろうか。以下そのことを、この大陸の内部の問題に限って、考察してみたいと思うのである。

たとえば日本文化についていうと、外来の要素としては二つあるいは三つの経路をへて、北からは大陸型、南からは海洋型の思想が流入し、いわゆる「吹溜り文化」の形で混合定着させられるに至った、というようなことが言われている。とりわけ大陸型の要素については、北方の千島、カラフト、沿海州を経由する北部ユーラシアの森林地帯の狩猟民文化の影響も考えられるが、何と

いっても、最大のものは、中央アジアから蒙古、中国東北区（旧満洲）、朝鮮半島を経て伝わった「ユーラシア・ステップ地帯」の遊牧民文化の影響である。⁽¹⁾

朝鮮半島の南部を介し、あるいは直接東支那海を経由して日本に伝えられた中国中南部の農耕民文化の影響についても、これを従来東南アジアや太平洋諸島の海洋漁撈民文化と一括して、南方型とする見解が多いが、私はその一部を大陸型に加える必要がありはしないか、というような考えも抱いている。また早くから言われてきた古事記、日本書紀の神話に対する、山海経あるいは三五歴史に書かれた盤古神話などの影響も、一がいにその何方ともきめられたものではないと思うのである。

それはともかくとして、日本神話の内容を構成する諸要素の中でも、とりわけ「山上來臨型」といわれる天孫降臨神話については、その類型の神話が蒙古や旧満洲、朝鮮半島にも多いところから、その起源がユーラシア大陸の内部にあることが比較的前から指摘せられてきた。天孫降臨というものは、太陽神アマテラスの孫であるホノニニギが、日本の九州の地に天降って皇室の祖となったという神話で、ヤマト朝廷の成立を権威づける王権神授思想の核心をなすものである。

この神話の内容は、天皇の即位式（大嘗祭）の儀礼と関係をもち、また稲作文化との関係も深く、一概に純北方的と限定しきれない要素を含んでもいるが、それはこの話が日本に伝わって、新

たな変様を受けた結果であって、神々の山上への来臨と、その裔が国家を形成統治する王者や貴人となるという、いわゆる貴種出自譚としては、大陸起源のものであることはまぎれもない。

朝鮮半島にも、古朝鮮の起源を語る檀君神話とか、伽耶国（駕洛国）の始祖となった首露王の降誕神話のように、日本神話との類似を示す降臨神話が多く、松村武雄氏はその類同する諸点として、(1)神の子が高きより国土に降下すること、(2)降臨に先きだつて他の靈格に使命を授けられること、(3)その使命が邦国を統治することにあること、(4)降臨した神の子がある女性と結婚すること、の四点をあげている。⁽³⁾

神々の国土への降臨神話は、皇室の起源譚だけに限らず、ニギハヤヒの畿内への降下のように我国でもその事例は極めて多いが、こうした発想の起源が、中央アジアのアルタイ系騎馬民族の遊牧民文化にあったとすることは、三品彰英氏や岡正雄氏の詳しい研究を通して、いまやすでに常識ともなっている。

そればかりではない。日本神話のテーマのかなりの範囲にわたって、何かしら大陸經由の思想の影響をもこうむっており、その話素の源を辿ると、インド・イラン神話とも、ギリシア神話とも、あるいはゲルマン神話との間にも、連関ないし類縁を認めることができる、というような研究が、今や進められて来ている段階であり、この方面での松前健氏や、大林太良氏や吉田敦彦氏らの業績はめざましい。

そこでこうした大陸の中でも東西ないしは南北に隔絶した地域の思想が、どのようにして交渉をもつに至ったか、その媒介手段を確かめることが甚だ重要になる。いうまでもないことであるが、異った地域の間類似な思想を発見したからといって、直ちにその影響を即断することは、学問的態度としては厳に戒めなくてはならないことだからである。この意味でも、かつて単純に日本神話と西洋神話との関係を独断的に論じた高須秀次郎氏などの主張と、今日の比較神話学の方法を駆使した前記の人たちの研究との間には、確然たる差異が認められる。

これは一つには、最近の西洋の、ミルチャ・エリアーデやジョルジュ・デュメジルや、あるいはクロード・レヴィ・ストロースや、ないしはその先駆となった多くの比較神話学者、文化人類学者の、すぐれた研究の賜物でもあろう。また、他方では、ユーラシア大陸の内部でも、従来よく知られていたギリシア・ローマ神話ばかりでなく、インド・イラン神話や、ゲルマン・ケルト神話あるいはスキタイやメソポタミアの原始神話の研究が進んだ成果でもあろう。

この中でも、とりわけ地理的に隔絶したゲルマン民族の北歐神話についてみると、日本や中国の神話との類縁など到底考えられぬはずであるのに、思ったよりも類似のテーマが少なからず見いだされるのが不思議である。もともと、ゲルマン民族の神話は北歐のみでなく、中欧西欧にもひろくゆき渡っていたものであるが、

キリスト教化の早かった地域ではその多くが抹殺され、あるいはフォーク・ロア化してしまい、キリスト教化のおくれた北歐、とりわけ海をへだてた大西洋上の孤島であるアイスランドに、比較的原形に近い形で残存しえたのである。

この場合でも、記録された時代はすでにキリスト教の影響が始まった後であり、また絶海の孤島での風土的変様も多分に考えられるので、北歐神話というよりも、その記録文献の名にもとづいて「エツグ神話」とよんだ方がよい、という意見もあって、うなずける。

ここでは、その神話の内容や他の神話との異同を論ずることが目的ではないから、その詳細に立ち入ることはしない。元来北歐神話ないし、エツグ神話の中の主要なテーマは、ライン川の中流以北の北海バルト海沿岸地方の、ゲルマン民族の本拠地で形成されたものともみなされるから、ドイツ神話とも呼ぶべきオリジナルなミュートスが、その地域で消滅したことは、かえすがえすも残念なことである。

ところで、その北歐神話の文献の一つであるアイスランドの「新エツグ」や、その著者であるスノルリ・ストゥルルソンの別の著作の中で、北歐の主神オーディン（オージン）Odin の故郷が、北歐よりはずっと東南の、アジアと考えられるような記事が見出されるのだが、これはどう考えたらよいであらうか。スノルリは十三世紀におけるアイスランド共和国の最大の思想家の一人

であり、詩人であり、歴史家であり、また政治家でもあった。

その著書の一つである「ヘイムスクリングラ」(世界の環の物語の意)は、北欧の古事記ともいわれている書物である。⁽⁴⁾この書の古い呼び名が「ノルウェー王のサガ」であったように、建國から十二世紀までのノルウェー王朝史を記した作品であるが、その序章は「ユングリング・サガ」*Ynglinga Saga* とよばれ、昔スウェーデンにあったユングリング王家がこの王朝のはじめで、さらにそのもとは北欧の神々に始まる、というような書き方になっている。

つまり、ゲルマン民族の神代から説きおこし、いわば王権神授思想の形をとって、ノルウェー王家の由緒と系譜を細かに記述しているわけで、その点わが国の古事記や日本書紀によく似ているが、問題はその神々の故郷が東方の、中央アジアの草原地帯と書かれている点にある。

二、北欧神話の神々と中央アジアの遊牧民

「古エッダ」および「新エッダ」に記された北欧神話の神々には、アース *Ass* (複数 *Eisil*) 神族と、ヴァン (*Van*) *Van* (複数 *Vannil*) 神族という二つの神のグループが含まれている。前者にはオーディン、トール、テュール、フリッグらが属し、後者にはニョルド、フレイ (*Frei*)、フレイアらが属している。主神はオーディンで、勝利と知恵と詩の神であるが、かつては雷神のト

ールが上位であった時代⁽⁵⁾、あるいは軍神テュールが重視された段階があったらしい、ともいわれる。⁽⁶⁾

北欧でオーディンといわれる神は、ドイツではヴォーダン *Wodan* (または *ヴォータン*) といわれ、「怒り」を意味する *Wut* からできた名前だという。エリス・デヴィドソンは両者を一応区別して、ドイツのヴォーダン信仰がルトネ文字の伝搬と共に北欧に伝わって、同様の意味をもつ古代ノルド語の *オーディスル* *Odhr* からできたオーディン *Odinn* の神の信仰が生まれ、古い豊饒の神々の信仰に後から加わったと思われる、という趣旨のことを述べている。⁽⁷⁾

このオーディンにはその名の意味することく、憤怒や激情や陶醉の性格に伴う恐怖の印象がつきまとっている。この神は元来、戦争の神であり、死者の神であり、供犠の神であり、また魔術の神でもある。アジア的なシャーマニズムの要素が極めて濃厚である上に、神馬スレイプニルを駆使して神出鬼没の活動をするあたりも、東洋の騎馬民族に縁がありそうに見える。だから前述のデヴィドソン女史なども、「オーディン伝承とシャーマンとの間の類似は、ゲルマン民族とステッパヤツンドラ地帯の住民との間に、かつて分かち合われた諸傾向に負うものである⁽⁸⁾」と書いている。これには単なる臆測に止まらぬ文献的証拠もあるのであって、それが外ならぬ前述の「ヘイムスクリングラ」*Heimskringla* なのである。問題はその記述の資料的価値如何にあるのだが、とも

かくそのスノルリの書の序章「ユングリンガ・サガ」によると、オーディンはかつては、中央アジアの遊牧民の首領ないしは神であつた。

スノルリによれば、黒海を境にして世界は三つに分かれ、東はアジア、西はヨーロッパ、そして北は大スヴィーショドとよばれた。大スヴィーショドはかつてスキュティア・マグナと呼ばれたロシアをさすらしい。この中を北から流れて黒海に注ぐのがタナイス川（今のドン川）で、その流域はヴァナランドまたはヴァナヘイムと呼ばれ、農耕民のヴァン族が住んでいた。

タナイス川の東方のアジアにはアース族が住み、アーサランドとかアーサヘイムとか言われ、ここをオーディンが首長として治めていて、その首都がアースガルドと呼ばれた。スノルリはここでは、アースの名をアジア（アシア）から引き出している。オーディンは偉大な戦士で、多くの国々を支配し、また戦えば必ず勝つ常勝の王者であつた。

やがてこのオーディンにひきいられたアース族とヴァン族との間で戦いが始まり、はげしい戦闘がつづいたが、結局両者は人質を交換して和解した。そのヴァン族の首長がニョルド、その子がフレイである。オーディンは更に一族をひきいて北上し、小スヴィーショド、つまり今のスウェーデンに移り住んで、各地にその配下の首領たち（神々）を配し、自らはシグトウナ（スウェーデンの古都）に止まった。その後をニョルド、三代目をフレイがつ

ぎ、これがユングリング王家の創始者となり、歴代の王統につながる、という次第である。⁽¹⁰⁾

オーディンここでは神とも呼ばれるが、正しく人間扱いである。さて、このような本来神話であるべきはずのものを、現実の人間の話のように作りかえて、王者や英雄や魔法使いの物語のようない扱いをするのは、エウヘメロスの論法 Euhemerism といわれるもので、このスノルリの書ばかりでなく、ブレイメンのアーダムやデンマークのサクソ・グラマティクスも、当時好んで用いた方法であつた。⁽¹¹⁾

その中では、スノルリが比較的忠実に神話を伝えようとする好意的態度を示しているのだが、にもかかわらずこのような扱いを何故試みたか、その理由をたずねると、スノルリの合理的精神ということの外に、すでにキリスト教時代に入って、異教の神をもはや本来の神として扱いえなくなった、という事情が考え合わせられる。

そうなると、オーディンの故郷が中央アジアというのも、怪しいことになるわけだが、スノルリが何の理由もなしにこのような書き方をしたとも思われぬ。とくに、このアース神族とヴァン神族との戦いという話には、何かしら史実の背景があるはずだ、というのが最近までの多くの学者や研究者の考えでもあつた。

それは、西暦四世紀に始まった民族大移動の初めの時期か、あるいはむしろそれよりずっと前の、恐らく紀元前一千年か、ある

いはその余も前にかに、実際におこった征服戦争の、これは神話化であるとする考えで、最近はその古い時代のものとする意見のほうが多い。つまりずっと大昔に印欧語族が、黒海の東方からゲルマンの地域に向かつて長期にわたって移住し、その後土着の農耕民と好戦的な移住民との間で激しい闘争がおこなわれたすえに和解が成立した、その歴史的事実が、後にこうした伝説的神話的な形をとるに至ったのだ、とするのである。

この見解は今も一部では有力であるが、これに批判的な新しい意見もある。たとえばジョルジュ・デュメジルは、これを「歴史的解釈」と呼んでその難点を細部にわたって批判したうえ、これに反対して独自の「構造的解釈」を示す。それはアース神族とヴァン神族の対立が、歴史的事実の反映とも、宗教的变化の影響とも考えるのでなく、「単一の宗教的・理念的構造における、互いに相手の存在を前提とする二つの相互補完的な要素」と見ることである。⁽¹²⁾

というのも、デュメジルは印欧語族の神話の綿密な比較研究の成果として、その神話群に共通な三機能体系とよばれるものを発見し、それにもとづいて北欧神話をも構造的に説明しようとして試みているからである。三機能体系とは、印欧語族の神話における神が、宗教的王権と戦闘と富の生産という三種の社会的機能にもとづいて、第一機能としての祭司的主権神、第二機能としての軍神、第三機能としての豊饒神に分類できる、とする考えをいう。⁽¹³⁾

この分類に従えば、アース神族は第一および第二機能を代表し、ヴァン神族は第三機能を代表するものとなる。したがってこれらは、北欧神話の中に最初から存在した相補的モメントであり、何れを欠くことも神話体系として構造的に不可能である。オーディンもまた外部から移入された神などでなく、ゲルマン民族に最初から信奉されていた神ということになる。

しかしそのデュメジルもまた、この問題とは別に、印欧語族がかつて本来の原住地であった場所から移動し、あるいは拡散してゲルマンの地域に移り、ゲルマン人となった可能性までを、否定するのではない。違うのはただ、この二元的、正確には三分的構造が、いわば概念的対立の形で最初から印欧語族の神話体系の中に存在し、それが侵入に伴い、原初の形のままで北欧にも伝えられた、としていることである。⁽¹⁴⁾

このことを確認するために、彼は同種の神話構造がインド・イラン神話にも、イタリアの古い神話にもあることを指摘し、その構造的一致を詳細に比較検討する。そしてこれを「アースとヴァンの戦争がゲルマン人の時代以前、さらにはゲルマン人の祖先や古代イタリア人、インド・イラン人等の拡散以前に遡る神話であるとするに十分な」⁽¹⁵⁾証拠とするのである。

私はこのデュメジルの構造的解釈を、卓見として評価するのにやぶさかではないが、それと共に、あるいはそれ以上に当面重要な見解と考えたいのは、「印欧語族の拡散以前に遡る」という神

話の原点への指摘である。北欧神話が究極的には、一つの共通の源から出たインド・ヨーロッパ語族の神話グループの一つで、その源泉を辿ってゆくと、アジアとヨーロッパを一つにする雄大な神話構想の起点に至りつく、というデュメジルの示唆は限りなく魅力的である。

クロスリー・ホランドは似た見解を、全く別の根拠からだがもっと通俗的におし広めて、次のように言っている。「北欧の報告は、究極的には一つの共通の源から出たインド・ヨーロッパ神話のグループの一つと見るのが、もつと的を射ている」。北欧の神話の要素の幾つかは、「明らかに東洋に起点をもつことを示すもの」であり、「層刺激的な理論に従えば、これは「キリスト前一千年と二千年の間の接触による」もので、「ゲルマン民族がロシアの草原地帯から西のヨーロッパへ民族移動の時代に移り、ついで北のスカンジナビアに移った時に、それと共に北欧の創造神話の基本も携えてきた(他のインド・ヨーロッパ族が同様の要素を東のインド、中国、また日本へ、南のイランや近東に運んだように)とするのである」と。

三、東西思想交流の道と騎馬民族の役割

私は今のところ、まだ、ほとんどのユーラシア大陸神話群が、インド・ヨーロッパ語族の神話構造やその話をひきついでたものとみる汎印欧語族主義には懐疑的だが、東西相互交流という意味

で、中央アジアから東ヨーロッパにかけての草原が、その一つの媒介地となったという考えには、大いに賛成である。

ついでに言わせて貰えば、前述の「歴史的解釈」と「構造的解釈」とを統合するところに、私自身は、歴史性と構造性とを二契機として含む統一の立場としての、生きた人々の行動に支点をおく、「実存的解釈」なるものを、つけ加えてみたいようにも思う。何故なら、神話やミュートスは、それを作り伝え、またそれを受容する各民族や社会や人間の実存状況と切り離して、論ずるべきものでもないと思うからである。

同じ構造をもつ思考が、直ちに同じ民族の思考だと推定してしまふよりは、そういう構造の思考を伝え、またこれを受け入れる異った民族の間の、実存的伝達ならびに受容の仕方、問題とされてもよいのではないか、というのが私の考えである。ユーラシア大陸の東と南と西に、それぞれ類似した構造の神話が存在し、その間に連関や影響関係が認められるという場合には、どうしても、それを伝達し媒介するものの役割が、考慮の対象とならざるをえない。

私は、それぞれ異った地域にはそれぞれ異った固有のミュートスが發生して然るべきだと考えるが、また、他地域への民族移動と、互いを媒介する伝達の運動との両面からして、相互の思想の連関もまた、当然問題とされてよいと考える。その意味で、海上交通のもつ役割を一応別にして、内陸移動の側面だけを取り上げ

るとすれば、どうしても、中央アジア・ステップ地帯の遊牧民の役割が、重要なモメントとして考察の俎上に浮かんでくる。

ユーラシア大陸を地形、気象の面から観察すると、アジアの東から東南にかけての、極端に多雨高温な、いわゆるモンスーン地帯と、ヨーロッパの北から西南にかけての乾湿、冷温適度に相半ばする地域とはさまれて、中間に極度に乾燥した、雨量の極めて少い地帯が、中央アジアの東北から西南のオリエント地方にかけて、斜に走っていることに気づく。

このうち、アジアの東部から東南にかけては定着する稲作農耕民の生活文化が栄え、西のヨーロッパには北の湿潤寒冷な平原と南の乾燥温暖な丘陵との特性を相補う農牧一体の生活が生まれたが、中間地域の場合は環境に適合して生きるには遊牧の道しかない⁽¹⁷⁾、それがこの地方独特の移動的な遊牧民の生態を形成発展させた。

この中間の地域の中でも北方には森林地帯と凍土地帯、東部と南西部には砂漠と山岳地帯が連なるが、その中央には草原地帯が介在して、遊牧生活のいわばセンターとなった。黒海の東方、カスピ海、アラル海、バルハシ湖の北側一帯で、ウラル山脈の南から、東方のアルタイ山麓にかけて連なる、広大なステップ地帯が遊牧民の主要な活動舞台である。その中を東ではモンゴル系の東洋人が、西にはスキタイ・アールヤ系のコーカソイドが、また南には東洋人と西洋人の混血といわれるトルコ系の人種（あるいは、

むしろトルコ語族）などが、縦横に活躍していたと思われる。

紀元前一千年紀頃から馬匹を騎乗に利用することが進んで、騎馬民族としての行動範囲が急速にひろまり、戦闘技術も発達して、やがて征服王朝の成立を招くに至る。南のメソポタミアが農耕文化の重要な発生地であったのに対して、キルギスの草原が遊牧騎馬民族文化の発祥地であったということもよく言われるが、その担い手は必ずしも印欧語族だけに限られていたわけではない。

だが、しばしばこの地域から、あるいは南、あるいは西、あるいは東への民族移動が起こり、前述の印欧語族文化が、インドやイラン、ギリシアやゲルマンに拡散伝搬していった現象にも、数回⁽¹⁸⁾にわたるこの遊牧騎馬民族の移動が関係していたことは疑えない。

最近の日本における比較神話学の研究成果によると、日本神話とギリシア神話との間にも極めて類似した話素やテーマや構造が考えられ、どうしても両者の間に、この騎馬民族を介しての影響があったとしか考えられないという。大林太良氏もその著「日本神話の起源」の中で、「古代ギリシアと日本の古典神話との、こういう奇妙な一致は、内陸アジアの馬匹飼育遊牧民によって神話が西から東へはこばれたためであろう」と書いている。

またこの意見に同調する吉田敦彦氏は、ギリシア神話とともに、原イラン系騎馬遊牧民であるスキタイ人の神話や、オセット伝説などを比較検討した上で、「ギリシアをはじめとする印欧系諸民

族の神話と共通する要素を含んだ、イラン系遊牧民（ステップ地帯の西半部に住む）の影響が、「東部草原に住むアルタイ系騎馬民族を媒介として、日本へ及んだとする見解を示した。もとより日本神話の神話素のすべてが、ギリシアやインド・イラン系の神話の影響のもとにあるなどは、これらの人々もみなしているわけではないが、その類似関連する部分に、遊牧騎馬民族の積極的役割をおいていられる点は、さすがである。

私は、中部草原の騎馬民族のこの点での媒介伝搬活動は、むしろ相互的といってもよいと考えている。というのは、アジアから逆にヨーロッパへの影響も同様に考えてよいのではないかと、いうことであり、その意味であえてゲルマン、北欧神話にも注目したのである。モンゴル系騎馬民族の思想が、そのものずばり北欧に及んだ例としては、フィンランドの「カレワラ」があまりにも有名である。

東西の古い交通路としてシルク・ロードが今や大きな脚光をあびているが、思想の伝搬系路としては、この道ばかりに注目するのには、私は賛成でない。ユーラシア大陸の東と西を結ぶルートは、古来三本あったといわれる。香山陽坪氏によれば、それは、「まず黒海北岸からカスピ海、アラル海の北を通り、カザフスタン北部を横断してモンゴリアに達する、いわゆるステップ・ルート（草原路）、東西トルキスタンを中心としてオアシス地帯をつなぐオアシス・ルート（漠島路）、最後に紅海から東南アジアの

島々や中国南岸まで海岸づたいに結んだ海上ルート（海洋路）」である。⁽²¹⁾

最近ステップ・ルートまでもシルク・ロードに入れている地図を見たが、二番目のオアシス・ルートが本来シルク・ロードと呼ばれているもので、ステップ・ロードよりも歴史が新しい。アレクサンダー以前にはこの道路は全通していなかったと思われる、盛になったのはローマが中国の絹を求める隊商を送り込んでからである。三千年も四千年も昔から使われたのは北方のステップ・ルートだし、民族移動もこの道を使って行なわれた。

元来遊牧の騎馬民族にとつて、草原はすべてが道路のようなものである。それは線というよりも面と呼んだ方がよいのかも知れない。それに彼等によるミュートスや思想、文化の伝達は、通商のように一定の目的のもとに、きまったルートを使って行なわれたはずもなかった。口承による伝達は長期にわたり、多面的かつ漸進的なものであって、このためには特定の道路も不要なことは、今日の隣家との垣根越しの対話に似ている。

口承による情報の伝達ということでは、騎馬民族は古来かずかずの利点に恵まれていた。第一に、彼等の騎馬による行動のスピードと距離とが挙げられる。数次の民族移動や征服行動は、また思想面、文化面での交流を可能にし、ここでは破壊さえもが統合につながった。第二には、彼等の口伝による伝達のメリットである。遊牧民という生活上の必要から移動の妨げとなる書物のたぐ

いを蓄えることをせず、文字よりはことばによって物事を記憶し、これを伝達したということが、同じく文字を知らぬ他郷の人々への、思想の伝搬を容易にしたと思われる。そして、第三は彼等自身の果敢で積極的な行動への意欲であり、同時にそれによる遅しい拡散能力であった。

伝達のメリットとともに、彼等の生活形態や社会構造の特性からする独特な思想の「生産性」ということが挙げられるが、もはやそれを論ずる紙数がない。多くの古く伝説や物語が民族移動期の英雄の行動に素材をおおいでいるが、この点でも騎馬民族は資格に事欠かない。松前健氏の挙げている英雄伝説のモチーフとしての、試煉、危難、漂泊、流浪、闘争、恋愛、不慮の死などの貴種流離譚の題材をも、騎馬民族は豊富に提供しうる立場にいた。

これを要するに、古代における東西思想の相互交流は、この中部草原の遊牧騎馬民族の力のおかげで、私どもの想像以上に広汎に行なわれていたと信じられるのである。

- (1) 吉田敦彦「日本神話の源流」(講談社)、一一二—一二三頁参照。
- (2) たとえば、松村武雄「日本神話の研究」(培風館)第三卷、五一〇頁以下参照。
- (3) 松村武雄、前掲書五一—二頁。
- (4) 谷口幸男「エッダとサガ」(新潮社)一一〇頁。また同氏訳「エッダ——古代北歐歌謡集」(新潮社)解説、三〇—二頁。
- (5) フレームンのアーダムが十一世紀に書いた「ハンバルク大司教管区の事蹟」によれば、スウェーデンの当時のウプサラの神殿の内室の中央の玉座を占めていたのはトールの像で、その両側に脇侍の形

でウオーダン(オーディン)とフリリッコ(フレイル)の像が並んでいたという。その跡にできたガムラ・ウプサラの教会を数年前に私が訪れた時にも、トールがかつて主神であったという話をくり返し聞かされた。

- (6) 軍神テュールはその名からして、ギリシア神話の主神と語源的に一致し、ルネ文字の記録でもこれを重視していた時代があったことが知られるという。谷口幸男「エッダとサガ」一一二頁。
- (7) H. R. Ellis Davidson, *Gods and Myths of the Viking Age*, New York 1964, p. 147—148.
- (8) *ibid.*, p. 149.
- (9) Snorri Sturluson, *Hemskringla (Sagas of the Norse Kings)*, transl. by Samuel Laing (Everyman's Library, New York). I *Ynglinga Saga*, chap. 1—2. Also cf. foot notes by Peter Foote.
- (10) *ibid.*, chap. 4—12.
- (11) Folke Ström, *Nordisk hedendom, 1967*, 菅原邦城訳、「フォルク・ストロム 古代北歐の宗教と神話」一四頁。また同書訳者あとがき、二二三頁。
- (12) Georges Dumézil, *Les dieux des Germains: Essai sur la formation de la religion scandinave, 1969*, 松村一男訳「デュメジール・デュメジール著 ゲルマン人の神々」三九頁。
- (13) 三機能体系については、直接デュメジールの指導をうけた吉田敦彦氏の研究と紹介が詳しい。たとえば同氏著「ギリシア神話と日本神話」(みすず書房)一八四頁以下参照。
- (14) Dumézil, *ibid.* 邦訳「三八—三九頁」。
- (15) *ibid.* 邦訳、六一頁。
- (16) Kevin Crossley-Holland, *The Norse Myths, 1980*, 山室錦・米原まの子訳「K・クロスレイ・ホランド 北歐神話」(青土社)

二七二—二七三頁。

(17) 筑摩書房版「世界の歴史6 東アジア世界の變貌」所収、村上正

二「征服王朝」一四八頁以下参照。

(18) 拙稿「ユーラシア大陸的視圈の構図——東洋と西洋とを結ぶもの——騎馬民族の遺産」(雑誌「日本及日本人」昭和五九年四月陽春号、通巻第一五七四号所収) 参照。

(19) 大林太良「日本神話の起源」(角川書店) 一四四頁。

(20) 吉田教彦「日本神話の源流」一三九頁以下。また同「ギリシア神話と日本神話」五一—五二頁。

(21) 「沈黙の世界史 6」香山陽坪「北ユーラシア 騎馬民族の遺産」(新潮社) 一四九頁。

(22) 松前健「神話と文学」(和田繁一郎博士古稀記念「日本文学 伝統と近代」——昭和五八年二月——所収) 二三一—二四頁。

(やました・たろう、哲学、日本大学教授)